

男体山頂遺跡の発掘調査

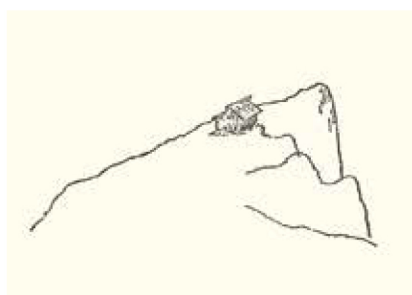
日光二荒山神社附属宝物館

館長補佐

鈴木泰浩

プロローグ、明治十年（一八七七）夏

一八七七年七月、来日中の米国人生物学者E. S. モースは日光を訪れ男体山に登り、山頂下の太郎山神社の周囲で発見された錆びた銭や刀剣を採集している。その際の様子は『Japan Day by Day』（出版は一九一七年、邦題は『日本その日〜』一九二九年刊行）に記されている。しかし、翌八月偶然にか山頂で陶器の甕が発掘され、この甕は社宝として保管されることとなった。



モースによる山頂遺跡のスケッチ

一、大正四年（一九一五）の日光

一九一五年、日光は注目を集めていた。この年は日光東照宮三百年記念祭にあたり、その記念事業の核となるのは東照宮のみならず輪王寺、二荒山神社を含む境内地に電動ポンプを備えた近代的な消火設備の整備と、各社寺に伝わる重器を展示する「日光社寺宝物館」建設であり、日光の文化財に係る保存と活用先の先駆的な取り組みを示すものであった。

六月より執行される日光東照宮三百年記念祭に先立つ、二月十七、十八日の二日間に亘り、東京麻布の紀州徳川家第一五代当主徳川頼倫の自邸内にある南葵文庫では、「史蹟名勝天然紀念物保存協会」主催の第二回講演会が、日光をテーマとして歴史、美術、建築、動植物、地質等の専門家らにより開催されており、その講演録が同年六月に三色カラー図版を含む豪華な装丁の『日光』として発行された。この図版の中に一八七七年八月に男体山頂で発掘された甕が「男体

山頂上出現ノ古甕」として紹介されている。このように各分野の日光に対する学問的関心は高まっていた。

「史蹟名勝天然紀念物保存協会」は名の示すように、土地と一体となった文化財の保護を目的に一九一一年十二月、徳川頼倫を会長に発足した会である。明治新政府による神仏分離令とそれに続く廃仏毀釈の気風は、歴史ある神社仏閣の建造物や美術工芸品の破壊と散逸を引き起こし、政府はその対策として既に「古社寺保存法」を制定していたが、頼倫らは帝国議会に「史蹟名勝天然紀念物保存二関スル建議案」を提出し、多分野の専門家等と学際的な啓蒙活動を続けて来た。その思いが通じ一九一九年「史蹟名勝天然紀念物保存法」が成立し、翌年施行されると各府県に「史蹟名勝天然紀念物調査会」が設置された。

この時期、足利出身の考古学者丸山瓦全（源八）をはじめ、古谷清（日光社寺宝物館）、田代善吉（中学校教諭）ら後に山頂遺跡の調査報告に係わることになる人々が、栃木県の調査委員に委嘱されている。



『日光』掲載図版

二、大正十三年（一九二四）の発掘調査

一九二四年七月五日発行の『考古学雑誌 第十四巻第十号』に古谷と瓦全は連名で、男体山頂出土と伝えられる遺物の調査結果を「日光二荒山頂発見品に就いて」として発表している。この中でこれらの遺物は「恐らく（引用者注 一八七七年八月発見の）此陶壺と同時に採集されたものと思ふ。」とし、その



山頂発見の甕と銅印（『日光二荒山神社奥宮絵はがき』より）

内容は古銅印、古鏡、鉄鐸、刀子、錫杖、小形鰐口、懸仏等「三十三種六十四点」であり、「水晶の切子玉これは云ふ迄もなく、（略）奈良の正倉院の御物中にも伝えられ、又奈良朝期の仏像の宝冠其他の裝飾に、此玉を用ゐられてあるのを見る。今男体山上から僅かに一個に過ぎないが、此種の玉の発見されたのは、又珍とするに足ると思ふ。」と結んでいる。

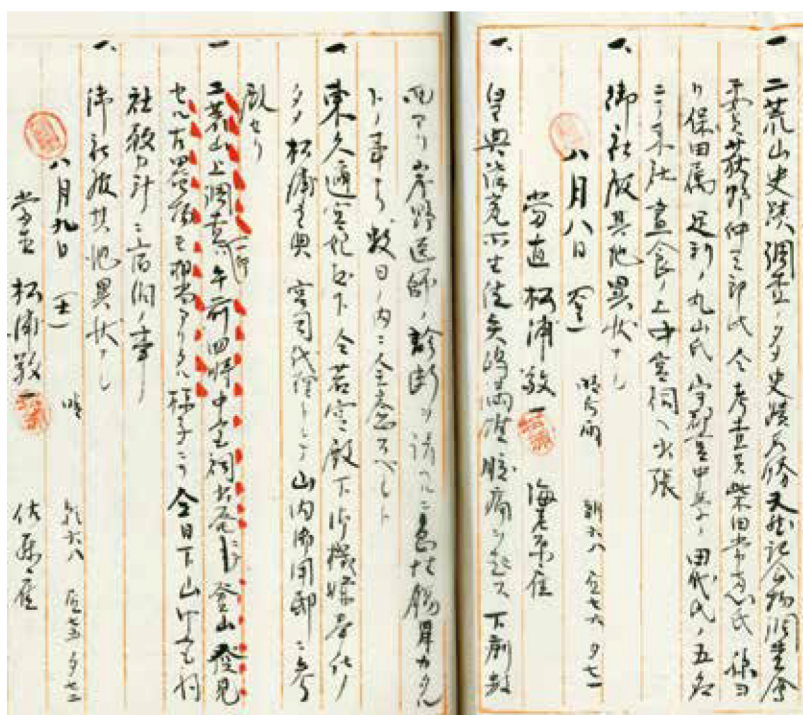
この発表は翌八月に行われる本格的な発掘調査の準備の一環と考えられ、『大正十三年 社務宿直日記 二荒山神社々務所』によると三月三十日に瓦全は古谷を通じ、このための調査に二荒山神社を訪れており、また、五月十五日には内務省史蹟名勝天然紀念物調査委員の荻野伸三郎も調査に訪れている。おそらくこの時期に発掘調査の具体的な実施に向けた打ち合わせが行われていたであろう。

同、八月七日には、内務省より荻野忠三郎、柴田常恵、栃木県より保田義嗣、県調査委員より丸山瓦全、田代善吉の五名からなる調査隊が、二荒山神社本社に集合、昼食後中宮祠に向かった旨が記されている。なお、二荒山神社から河島勲彌宜、松井美幸主典、斎藤寛照雇の三名が随行していることが、八月九日の記載から知れる。（注1）

注目されるのは『大正十三年八月起 日誌 東照宮社務所』八月七日の記載に「宮司二八午後三時ヨリ内務省ヨリ史蹟調査ノ為メ出張、荻野伸三郎、柴田常恵氏等ノ一行ト共ニ男体山ヘ登山ス」とあり、高松四郎東照宮宮司も合流し調査に参加していることである。これは荻野がかつて内務省神社局勤務時代に高松と知己を得ていたか、社寺宝物館顧問として十年近く社寺と係わりを持っていた為かもしれない。なお、今のところ輪王寺には調査に参加した事を示すような記録は見つかっていない。

調査は翌八日の僅か一日限りであったが、前掲『社務宿直日記』八月八日の

記載には「二荒山上調査一行八午前四時中宮祠出發ニテ登山 発見セル古器物モ相当アリタル様子ニテ全日下山中宮祠社務所ニテ宿泊ノ事」とあり、傍線部には朱墨で点が付され、事務的な淡々とした記述の多い日記にあつて神社の関心の高さが伺われ興味深い。



『大正十三年 社務宿直日記 二荒山神社々務所』

8月7日から8日にかけての記載。右頁（7日）冒頭に荻野らが中宮祠に向かった様子が、左頁中央の調査状況には朱墨で傍点が付されている。

調査の概要は瓦全により、同年十一月五日発行の『考古学雑誌 第十四巻 第十四号』の「続日光二荒山頂発見品に就いて」に速報されている。調査地は「二荒山上の西端、太郎山御宮の小祠より数尺離れた巖石の間」で「一歩誤れば生命に関する程の危険を冒して、数十尺の断崖絶壁の下に廻り込んで」遺物を発掘しており、その苦勞が偲ばれる。報告された出土品のリストは、古鏡、懸仏、鈴、陶磁器片、刀子等三十種六十点程であるが、「発見品は経塚関係のものが多いいけれども、此地はどうしても経塚とは思はれない。恐らく伝説の如く、廃仏毀釈さわぎの時、此山上の奥宮及び太郎山宮の社殿内の宝物を、此巖石の間に隠蔽せしものを、今日まで忘れられて居つたと、推定する方が至当かと思は

れる。」と各時代の遺物が混在する出土状況を推測している。

古谷が中心となってまとめられた正式報告は一九二七年『栃木県史蹟名勝天然紀念物調査報告 第二輯』中「第五章 経塚関係品」の「一、日光二荒山上発掘品」に一九二四年七月報告の発見品と共に掲載されている。ここでは一、古銅印(4) 二、古銭(6) 三、古鏡、破片共(28) 四、仏具(32) 五、玉類(6) 六、鈴(9) 七、武器(16) 八、土器及陶器(26) に大別された百二十点を超える遺物が報告されており、これらを「古キハ奈良朝末期ヨリ平安初期ト思ハルモノアリ、ソレヨリ、藤原・鎌倉・足利ト中期ノ遺品ヲ混ジ、更ニ下リテ徳川期ノ遺品モ混在ス。而シテ最モ多数ヲ占ムルモノヲ藤原期ノ遺品トス。」と十〜十二世紀をピークとした古代〜近世の遺物群であり、その出土状況を「明治ノ初年廃仏毀釈ノ喧シカリシ時、隠蔽ノ意味を以テ埋藏セラレタルモノモアルベク、又所謂経塚ト称スル、結縁供養ノ信仰上ニ胚体セル埋経ノ思想風習ヨリ埋藏セラレタル分モアル事ト考ヘラルナリ。」と廃仏毀釈の混乱期の埋藏だけでなく、宗教行為としての埋納の可能性に触れている。そして「之レ実ニ日光開山ト其信仰上ノ史実ヲ語ル上ニ千金ノ重ヲ加ヘタルモノナリト伝フモ過言ニ非ザルナリ。」と勝道上人による日光開山を裏付ける貴重な資料であると結論付けている。萩野らによる大正十三年の発掘調査は小規模のものであったが、大きな成果を残すものであった。

三、昭和三十四年(一九五九)の日光

第二次世界大戦が終了し、日本社会が復興を成し遂げた頃、再び日光に注目が集まっていた。一九五九年五月、読売新聞社主催の「日光文化総合調査」が実施された。これは、約二十日間に亘る美術工芸、民俗、動植物、考古、地質等、各分野の専門家らによる「日光」の悉皆調査であり、新種の動植物の発見や、社寺が所有する文物の再評価が行われ、この調査を基に『金銅装神輿』、『山金造波文蛭巻 大太刀中身無銘(号 祢々切丸太刀)』等は指定を受けている。

新聞報道によれば、総合調査の最終日である五月二十六日には、文化財保護委員会(現文化庁) 文部技官保坂三郎、東京国立博物館米田太三郎、千葉大学助教授神尾明正ら考古班による男体山頂の調査が行われ、約一時間の間に鏡、陶磁器、鉄鏃等二百点余りを採集している。保坂は遺跡の性格について「山頂は上代や中世の人々が神へのまつりと仏への帰依を願う経ヅカの複合遺跡ではないか」と述

べている(注2)。また、八月には、二社一寺と東京国立博物館の主催による「日本古美術夏期大学」が東照宮権宮司額賀大興、輪王寺一山唯心院住職福井康順早稲田大学教授、二荒山神社喜多川清香権宮司らを講師として山内及び中宮祠を会場に開催された。このように昭和三十四年の日光は、大正四年の有様を彷彿とさせるものであった。

その一方で、保坂らの調査に見るように、山頂で多くの遺物が採集できる状況が報道されたことにより、盗掘による遺跡破壊が懸念され、八月一日から斎行される登拝祭を目前に控え、その対策は急務であった。六月に入るとその調整が開始され、昭和三十四年度の『社務日誌』には「栗生権禰宜、柴田典仕、小松出仕、男体山出土品調査依頼ニ付上京(四日)」にはじまり「男体山頂出土品調査打合せ出席ノ為宮司代務者栗生権禰宜文化財記念物課へ出頭(張)(二十二日)」まで二十日間足らずの間に神社職員が計五回の東京出張のほか、保坂、神尾らも来社し(十六日)慌ただしく準備が進められた。

斯くして、発掘調査主任に斎藤忠文化財保護委員会調査官以下、保坂三郎技官、佐野大和國學院大學講師、亀井正道同大研究員、近藤正、磯崎正彦同大学院生らの発掘調査員並びに、地質調査に神尾明正助教授、歴史調査に文化財保護委員会近藤善博文部技官、そして調査補助員に二荒山神社職員を充てる調査団が組織され、調査開始は七月一日と定められた。

四、昭和三十四年(一九五九)の発掘調査

七月一日夕刻、中宮祠に集合した調査団と報道関係者ら一行は発掘調査開始



「日光文化総合調査」で採集された遺物の一部



1959 (昭和34) 年7月3日の調査状況 (第一次調査)

右端で指示をしているのが発掘調査主任の斎藤忠調査官。左端のカメラを構える人物の左手の窪みが1924 (大正13) 年の調査地点。その背後 (左側) は断崖となっている。

奉告祭に臨み、斎藤主任が代表して玉串を奉奠した。翌二日朝、山頂を目指し出発し、午前十一時山頂の奥宮と太郎山神社で発掘調査開始奉告祭を斎行の後、調査が開始された。早々に多くの遺物が出土し、期待は高まったが、急変する山の天候は度々調査を中断させ、出土遺物の記録に追われる調査員は昼食も交替でとらなければならぬ状況であった。標高二千四百メートルの山上の冷氣や希薄な大気は調査をより困難なものとし、加えて山小屋逗留の制限された状況下において、資材の不足から、調査も限定的なものとなった。特に一九二四年の萩野らによる調査地点の先は切り立った崖になっており、その調査のためにはザイル等、本格的な登山装備が必要であることから断念せざるを得なかった。これらのことから、開始より四日目の七月五日をもって下山することとなった。その日の日誌には「斎藤調査主任一行午後四時半山頂調査終了ノ

確定と、太郎山神社背後の崖下に転落堆積している遺物の収集であった。特に崖下の調査は神社職員がザイルに身を託して崖の割れ目を降下する危険な作業であった。十月十六日、太郎山神社前面遺跡南端部の確認を終え、全ての調査は終了となった。調査の成果は四年後の一九六三年十一月『日光男体山―山頂遺跡調査報告書』として刊行された。



ザイルで断崖を降下し、遺物を採集する吉田健彦出仕 (現名誉宮司)
8月の第二次調査にて

前の十月までの間、三次に亘る延べ七日間の調査を実施した。これらの目的は、一次調査で検出された遺跡の範囲



太郎山神社背後の断崖
断崖の裂け目に遺物が堆積している。

上 上野権禰宜松田宮原出仕等ト共ニ下山 全、七時中宮祠ニ着 山頂出土場所ニ二荒山神社ノ「古代祭祀品埋蔵聖地跡」木標ヲ建立 調査奉告祭執行ノコト」と記されている。その後中宮祠で出土遺物の水洗・整理また、前白根、奥白根、太郎山等の踏査を行い七月十日第一次調査は終了となった。

その後は、斎藤主任ら調査員の残した指示をもとに神社職員が主体となって、八月の登拝祭、九月の仲秋登拝祭の奉仕後並びに閉山

五、男体山頂遺跡出土遺物の概要

最後に山頂遺跡出土遺物について記す。主な遺物の詳細な解説は別稿に譲り、ここでは概要に留める。

・出土状況 大正期の瓦全らの報告にあるように、各時代の遺物が混在する状況は、昭和の調査でも確認されている。これは高山の山頂における表土の凍結と溶解の繰り返しで層序を乱すことと、露出した遺物が大雨や強風で原位置を失うことによるものであろう。

・出土遺物 鏡（漢式鏡・唐式鏡・和鏡）、銅印、錫杖頭、法具（独鈷杵・三鈷杵・羯磨・繞）、経筒・経軸頭、火打鎌、御正鉢（懸仏）、玉類、銅製容器（合子・鉢・鉢・盤）、柄香炉・鰐口、鈴、鉄鐸、禪頂札、種子札、武具（劍・鉾・刀子・鎌・兜・弓矢）、農具（鎌・斧）、馬具（鐙・轡）、銭（含、延喜通宝）、陶磁器類（含、緑釉陶器・舶載磁器）等、多岐にわたり、陶磁器類の小片を含めるとその数は一万余点上る。その時代は古墳時代後期に遡るものも若干認められるが、纏まった出土遺物は奈良時代以降であり、以後江戸時代まで連続と認められるが、そのピークとなるのは平安時代末期から室町時代にかけてである。これら豊富な法具・仏具の出土は、勝道上人による男体開山と古代山岳信仰の姿を示すと同時に、日光における神仏習合の歴史を示す貴重な遺跡である。

特筆されるのは、鏡の出土量が多い点である。大正期の調査で二十八面の鏡が出土しているが、昭和の調査では更に百三十四面の鏡が出土している。その中には、国産の模倣品ではあるが古墳時代に位置づけられる漢式の二神二獸鏡が含まれる。主体となるのは平安時代後期のもので、奈良時代末期に始まる鏡の奉斎が平安時代後期に最盛期を迎える様子が見て取れる。

陶磁器類については、陶器は小型壺（瓶）に器種が集中しており、これらは渥美、常滑産のものが認められるが、軟質の所謂「在地系」と呼ばれる狭域流通品が一定量含まれている。これら多数を占める小型壺の用途（献供された内容物）と産地の検討により、山頂での祭祀の状況と信仰の広がりを知る手掛かりになるものと思われる。

初の学術調査から百年を迎えようとしている今、最新の研究成果を基に出土遺物の再検討を行い、新たな視点で本遺跡を評価することが求められている。

〔注〕

（注1）

「大正十三年社務宿直日記二荒山神社々務所」

三月三十日

「午前十一時東照宮宝物館主事古谷清氏ヨリ宮司ニ電話、足利ノ丸山氏来見、先般山上ヨリ出タル古鏡其他一覽イタシ度趣ナリ（略）午後一時来社全二時退社ス」欄外に「史蹟名勝天然紀念物調査会委員 丸山源八 古谷清」

五月十五日

「内務省史蹟調査委員荻野伸三郎氏登見、豫テ当社若見ノ古鏡其他ノ宝物ニ付調査セリ」八月七日

「二荒山史蹟調査ノタメ史蹟名勝天然紀念物調査会委員荻野伸三郎氏 全考査員柴田常恵氏 県ヨリ保田属 足利ノ丸山氏 宇都宮中学ノ田代氏ノ五名ニテ来社昼食ノ上中宮祠へ出張」八月九日

「二荒山上史蹟調査委員一行五名及河島欄宜松井主典 斎藤雇下山婦社ノ事」

（注2）

「よみがえる日光文化」「山頂は祈りの象徴―中世の遺物ちらばる」

読売新聞 昭和三十四年五月三十一日（一九五九）

参考文献

- 日光二荒山神社 一九六三『日光男体山―山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
竹澤 謙 二〇一八『丸山瓦全―とちぎの知の巨人』随想社
斎藤 忠 一九七六『日光男体山頂遺跡の調査』『日本古代遺跡の研究―論考編』吉川弘文館
時枝 務 二〇二二『山岳考古学―山岳遺跡研究の動向と課題』ニューサイエンス社
篠原祐一 二〇一六『男体山頂遺跡』発掘調査「とちぎを掘る―栃木の考古学の到達点」栃木県考古学会編 随想社